



丹羽文雄集

日本文學全集

43

新潮社



Printed in Japan ©

日本文學全集 43 丹羽文雄集

昭和三十五年三月十六日印刷
昭和三十五年三月二十日發行

著者 丹羽文雄

編者 亀井勝一郎

発行者 佐藤亮一

印刷者 高橋武夫

発行所 株式會社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(341)七二二 振替東京〇〇八

印刷所・大日本印刷株式會社

製本・神田加藤製本所

本文用紙・十條製紙株式會社

箱貼・カバ・特種製紙株式會社

表紙布地・望月株式會社

定價 二六〇円

△落丁・乱丁本はお取替えいたします△

目次

鮎

五

贅肉

一九

厭がらせの年齢

四七

遮断機

八一

日日の背信

一七七

注解

五七

年譜

五九

解説

五一

亀井勝一郎

丹羽文雄集

一

海棠と夕顔に雨がふっていた。俵屋が母の和緒の手紙をもってきたので、津田は朝からの荷立つしよぎいなさを吹きとばす気で家を出た。電報で東京から呼びよせられて来たが、肝心の和緒がうちを開けはなして何処かに姿をかくしていた。大変問題にあわない昨日来であった。

長良川が軒下にながれている或る料亭のはなれに和緒はいた。津田が熊笹の庭を渡っていくと、和緒は障子をあげた。いつものように陽気なほほ笑みだったが、どこかに元気がない。元気がないと、少しぐいと来るものを感じて津田は目を大きくした。それで母と子の挨拶になった。

「朝はね、もう少しのところで守山と喧嘩するんではたよ」

笑いながら、しかしその語気は刺々しかった。刺があるの、まだまだ朝の余憤がのこつてい、自分はまだ慍むさどっているのだという気が津田はした。

「籍をね、わたしの籍を守山が、守山家へいれてほしいと言いだしたんだよ」

「結構じゃありませんか」なんだそんなことかと安心するものがあつたが、それはそのまま押し殺して、「電報はそのことですか」こう言つたとき津田は、まるで慍むさどつたようにぶつきら棒であつた。内心、これは本当に結構なことではないか、と座布団におさまつた。

が、和緒にしてみると心外だった。自分の考えに味方をし、力づけ、助けになつてくれるであろうと津田を頼みにこそすれ、まさかこうはつきり逆らいはすまいと当てにしていた思惑がいっぺんに叩かれて、もう胸いっぱいになつて来る顔を暫く津田の前にじつとさせ、それから言つた。

「いやだよ。いやだよ。誰がなんと言おうと籍は移し

てやらないから——」

唇を歪め、泣きだしそうな瞬きを二つ三つする。張りのあるその眸に力を籠める風だった。そうでもしなければ、和緒は津田に言い負かされる怖れがある。津田は和緒のそばにうつちやられた「主婦の友」と、「映画と演芸」の極彩色をちよつと眩しそうに眺めやうた。

「誰がいま更入籍なんて素直にうけてやるものかね。そうだろう。守山も考えなおしてみるがいいんだよ」と和緒は少しこわい顔をした。

津田は自分が叱られに來たような氣持であつた。

「何と言われようと移しちゃやらないよ。断るんだよ。きつぱりと断るんだよ。わたしはここを一步も離れやしない。え、動いてやるものか」

この春、守山から津田のところへ、和緒にいい縁談の話があるがどうだという風な手紙がきた。津田はこうした問題になれていないので、どうしてよいか途方に窮した。投げ出した氣でつい返事を出し遅れてしまふと、今度は和緒から、守山が何を言ってきた返事をしてはいけないと手紙が來た。それで安心して捨て

て置いた。守山はいま経済的に行き詰っているから自分との関係をきりたがっている。が今きられてはこちらが困る、もう少したてば暮しの方法が立てられるからという母の文面だった。和緒は池の坊の師匠の腕をもち、裏千家のこれも教えられるだけの素養がある。現に四、五人の娘に教えていた。その方法で成算が立つのであろう。

津田はこれで十数年来、和緒と妙な境遇にいる。當時やうと小学校に通いはじめた津田をのこして、和緒はある旅役者を追つた。その後、一の宮、名古屋、加納を転々として、守山の世話をうけ岐阜に落着いてから数年になろうとする。和緒はまだ四十二歳、津田は十七の時のひとり子である。津田は小さいときから母のない人生に慣らされているので、母をさほど必要にしかかった。一年にこの母と子は五、六度逢う。まちがつても和緒は自分の生活を津田に話さない。話されないから津田も持前のひねくれた氣遣いで、よしその氣ならと非人情に、だから津田の態度は母の日陰ものを認め、安んじているかのような形であつた。安んじて——この言葉には文句はあるが、肯定してもいい津

田の氣であつた。

そこへ、守山の細君が亡くなった。すると如何にもその時を待っていたという風に、守山が簞云々をもち出した。

和緒は津田に言うのである。

「この春のことをあの人も思い返すがいいさね。どの顔さげて、と言いたいところじゃないか。守山つたらね、信太郎、奥さんがもう駄目だと言われるようになってから、急に様子が熱つくくなって来て、しつこいたらありやしないの。えげつない位、てれくさいったらなかつたよ。本當にわたしはもてあましたよ。まるで獣みたいに、夜も昼もみさかいがつかないので、女中の手前、出入りする娘さんの手前、わたしは何度赧い顔をしたことだろう。恥ずかしいったら、男も年をとると、することなすことが露骨で、脂つくくつてね——」

若し世間の健全な人々がこうした言葉を生みの母の口から聴かされる場合、聴手はいったいどんな顔をして聞くべきものか、と津田は考えた。するとこつんと来るものがあつた。津田は苦笑でごまかした。

先ず、守山という人間は——

「わしは氣が短い。いつもあとで後悔しているほど氣が短いんだよ。かつとなると、何をしでかすか判らない。時どきそんな自分が怖ろしくなる。だから若しお前がわたしを裏切ろうものなら、わしはきつと骨身に応えるほどお前に思い知らしてやるだろう。何も今更信太郎の意見をきくまでもないんだから。そうだ、わしの顔に泥を塗るような真似をしたら殺しかねないよ」

と言つてのける性格なので、和緒はすっかり震えあがつたのである。全く殺しかねない守山であつた。

だから早速和緒は逃げだした。発見されたら殺される氣で、かくれた。そして津田に電報をうった。

津田が和緒の家についたとき、雨がふっていた。守山が疲れた人のように、雨の脚を眺めて頑張っていた。津田が挨拶すると、

「あまり和緒を唆かさないでほしいよ」と頭からだった。

守山にしてみると、説明の煩瑣をはぶいた訳である。が津田はなにも母から今度の報告をうけていな

い。母の留守にも深い理由を嗅ぎだせないのである。津田は静かに、どうして自分がそんな悪者であるような言い懸りをされなければならないのかを尋ねた。

「困るな。こんな場合に白らっぱくれて、お互の気持ちを悪くするだけだからね」

津田は重ねて呆然とした。

「まあ三人で逢い、ゆっくり相談するより仕方がないよ。この場合肝心の和緒がいなくては始まらないよ。あんただけでは心細い問題だからね」

語尾を苦笑に収められた瞬間、津田はぐっと怵える気持でいっぱいだった。が僅かに、和緒の五年間の生活思い返し、蒼くなるだけで済んだ。津田は平常、自分でも十分気がながいとは言えないからである。

母親は言う。

「それで、お前はどうか思いだ。やつぱりわたしは守山へ入籍するのが本当なのかしら。あそこを死場所と定めて、生涯をきめてかかるのが本当なのかしらね」

やるせない表情をする母を眺めて、このとき津田は

少しほかごとを考えていた。津田は母の十七の子供であることを思い出している。まるで姉弟だ。人一倍大きな自分に小柄な和緒は姉の形である。かつて母と子は柳ヶ瀬を歩き、和緒が若い男と一緒にたたと噂をまいて守山をやきもきさせ、それをしんから和緒は可笑しがったが、津田はそれだけではすまされない苦い水を感じた。母と子の差別の具体化だ。津田はいつも十七からの母の役割を気の毒に思っている。津田は小さなころよく泣いた。泣いて泣きやまないと、どうしてあやしてよいものか、心細くなって十七の母は、津田を膝にのせてああんと一緒に泣きだしたものである。すると姑は、先ず小さな母親からあやしにかからねばならなかった。

津田は応える。

「こうした問題は一時的感情できめるのは危険ですよ。守山の人格は第二のことでしょう。将来のどうせ母さんと一緒に成れない僕たちの世間もよく考えて、母さんの老後の安定という物質的な立場から、いくらか狭くこの問題は極めるべきでしょうが」

「それで、お前の考えは」

「母さんの氣持が肝心ですよ」

「いえ、お前の意見では——」

「母さんは」

こいつ狡いな、と自分を感じた刹那、和緒は突然両手をつツ張り立上がつてきた。不意だった。津田はひとたまりもなくどしんと床の方へぶつ倒れた。

「この薄情もの。親にむかつて何という情知らずを言いだい。薄情もの奴、卑怯者——。負けはしないぞ。言い負かされはしないぞ。負けてなるものか」

全く防ぎようがなかった。和緒の小さな拳固が、津田の鼻さきをつづけさまに飛ぶ。腕を烈しく上下させて母はぜいぜい息を切らした。津田は一度、したたかに曲った自分の鼻を感じた。

「そんな無茶な、そんな無茶な——」

こう言つて津田は、自分の顔の上にかむさつてくる和緒の体の崩れるのを支えた。

「お前はこんなとき、わたしを責めるんだ。今まで何も言わなかったけど、腹の中ではしょつ中わたしを虐めどおしていたんだろう。そうだろう。だから今となつて、ひとが落ち目になつたからつて——」

胸倉をとらえ、小突きまわす和緒の腰に、津田は両手をあてがつていた。潤んだ眸を見かえして、あながちこの母を虐め通してきたのではないが、まんざら虐めなかつたのでもないと思つた。

「誰が負けてやるものか。負かそうなんて薄情だよ。情知らずだよ。わたしはこれで、誰にも頭を抑えられてはいないんだ。——なんだ。そんな頭髪をわけて、偉そうに、柔道二段だつてちつとも怖かないよ」

津田は静かに居ずまいを直す。そして、世にも情ないという顔をして、

「ぼくの言い方が氣にさわつたら堪忍して下さい。ぼくは寧ろそう考える方が、いちばんいいんじゃないかと思つたんですが」

と言う。しかし凡そ、詫びるといふ氣持とは相違して母の顔を眺めていると、朗かな当惑感がごろごろと津田の胸の中をころがるようであつた。何か、やわらかい肉感的な当惑である。

「後生だから、ね、信太郎、そんな風に言わないでくれよ。わたしのして来たことは確かによくなかつたよ。それは十分判つているよ。でも、今となつて責め

るなんて、あんまりだよ。あんまりひどいよ」

眸が光り、濡れてきた。それから、と逃げる気持で、しかし泪はやはり痛かった。がこれで、母の発作も運びよせられる処まで行きついたと考えた。その出鼻へ、いきなり「主婦の友」が飛んできた。雑誌は津田に身をかわされて、模糊として山静かなり花の山、という掛軸につき当った。津田はすぐ、まるで子供に玩具を拾ってやるという風に雑誌を拾いにかかる。すると、和緒が膝をつめてきた。そんなもの静かな、動じない津田のようすに腹を据えかねるのである。

「わたしはこれでも、今日の日まで気の休まるという時はなかったんだよ。お前を捨てて家出した罰はもう十分にうけているよ。もう沢山するほど苦勞して来たよ。長い間だったよ。その間には、若し自分さえその気になるならわたしは何時だって幸福になれたんだよ。暢氣をしようと思えば、いくらでも太平楽がきめてもいられたんだよ。何のためにわたしが今日まで苦しんできたとお思いなのだい。みんな子供が可愛いからじゃないの。お前さえ初めから捨ててかかる気だったら、母さんはどんなにも結構な身分になれたんだよ。

それが判んないのかい。大学校までいって、そんな親の切ない心が読めないのかい。親にむかって偉そうに意見するのが子供じゃないよ。わたしはお前が可愛いから白を切って守山へ行けないんだよ。若しわたしが守山の人間になってごらん。一年に五、六回しかお前に逢いたくても逢えないのに、それ以上はたの人達に気がねをして、思うように逢えないじゃないの、今だって、母さんは、逢いようが少ないと思っているのに——それも、先にお前と一緒にされる見込みがあるのなら嬉しいよ。でも、お前には、異ったお母さんがある。一ト月とお前とわたしは一緒にはいられない義理合じゃないの。——なんと言う親不孝をお言いなさい。ここの道理が、こんなこと位判んないのかい。判っていても判らない顔をして、そうだよ。お前はまだわたしを虐め足りないと思っておいでだろう。さあ、はつきりと言ってごらん。母さんの口からこんなことまで喋らせて、さあ、言ってごらん。はつきりと応えてごらん。人を虐めるにも程があるよ。ひとが落ち目になっているのをつけこんで——、ええ、口惜しいよ。口惜しいよ」

津田は、があんとうちのめされた。母に對するこれまでのいろんな氣持の痛手や、淋しさやるせなさがいっぱんに蘇ってきた。ひねくれた持前の虚弱さが、洗いたてられたような氣がした。吊しあがつた可愛い目もとから、泪が堰を切りぼろぼろと落ちて來た。泣いている母はまるで子供だ。そんな子供々々した母が、津田は訳もなく好きになるのだが――

その時である。庭石をこちらへ近づいて來る誰かの足音がした。津田は母の手をとると、

「さあ、早く顔をふきなさい。ここはうちじゃありませんよ。ほら、誰か來たじゃないの」

しかし和緒は濡れたままの顔を、やがて開くだろう障子の方へぼんやりと向けていた。黙って顔を見せたのは女中だった。

「遅くなってすみません」そう言つて女中はすぐこの場の変な空氣を嗅ぎつけたように、

「あとはずぐ只今――」早々に引退つていった。

鮎の魚田である。盥洗の水が場所ちがいのように揺れていた。途中にはいられて、津田はやれやれと思うのである。が、

「お前はいつもわたしを黙って眺めていたね。それが怖かったよ。何よりも怖かったよ」

「そうですか」と津田はちよつと目のやり場を探した。「母さんの心に、そんな考があるうとは考えてもみなかったのです。浅薄でした。今まであまり子供らしく、非人情ぶつて生意氣でした。これから決して母さんを虐めませんよ。何とかいい方へ向けましょう。これからはよく、大いに努力しますよ」

誇張したものの言い方も、仕舞いには実感をもつて來、津田は晴々しい氣になった。

「さあ、お飲みよ」

酒は富久娘、生一本、母のお酌で盃をあげた。

「誰だつてわたしののような運命を望みはしないよ。で、一度足の向き方がまちがつてしまふと、容易に真直ぐにはもどつてくれないのだよ。氣ばかり焦つてね。」

もつとも女のひとりぐらしがどういうものか位、お前にはよく判っているだろうけど」

「判りますよ。しかしその判り方が、母さんの思い通りな判り方でなかったからつて、判つてない訳じゃありませんよ。母さんの不満はこの判るといふことの客

観的なのと、主観的なとの相違にあったような気がするんだけど」

餉台の端が気短かにちよつと鳴つて、母は再びこわい顔をした。

「もつと身入れて——」

「はい」と応えた津田は、「入れてますよ。親のことじゃありませんか」と笑つた。

「それでいて籍を入れるとお言いかい」

和緒の口調は鉄のように固く、冷ややかであつた。

津田はどうとうしてやられたような気がした。が刺を覚えない気持で、また何事も逆らうまいと思つた。この母には賛成だけが必要である。津田は言つた。

「守山のことは、何とか解決しますよ。併し、手切れにどうのこうのと言ひ出しては厭ですよ」

「誰がお前そんなこと言うものかね」

鬚を眺めやって、ふと守山は可成り大きな体格だつた。津田は思つた。

「いざとなれば何もかも守山にくれてやる覚悟でないと駄目ですよ」そう言つて厳格な顔をした。

「あの人のものは五、六本の軸とそのほか骨董物が少

少あつたかしら。それだけだよ」

そんな話の種類より、この場合津田は魚田をつづいてゐる方が遥かに気が楽な訳だつたが、——津田は守山を描いた。交渉を引受けたものの自信がない、氣になつた。

「勿論、今後絶対にこれまでのような生活は絶つていただけるでしょう。焼棒杭にまた火がついちまつたなんて、厭ですよ」

そう言つて津田はこれは厭な言い方だと赧くなつた。熱い気がした。素直に自分の言葉に頷く母を眺めて、もう一度赧くなつた。

「わたしも、もういいおばあさんだからね」

その四十二歳を、本当に津田は信じかねるのである。更に本能の過失を重ねるだろう和緒を、和緒自身より津田の方が慥かと予言出来るからである。この春の出来事がそれだ。体よく捨てられようとして、またうやむやにもとへ戻つて、その後母は別れようとしなかつた。母が弱いか守山が烈しすぎるのか、そのどちらでもあらうと考える津田の目にうつる平常の和緒は、若くて、あまりに端麗すぎる。津田は和緒と永

い間母と子の生活をもたないで来たその所為か、和緒を母として見るよりも、とき時、ひとりの女として眺めている。不埒な息子だ。津田は母の美貌を恨むなど、そんな芝居気は持たない。むしろいつまでも、若く美しくあってほしいと望んでいる。——並んで立つと漸く自分の肩に髷のとどく、関西風な大きな、豊かな前髪。黒く大きな瞳。鋭い日本人ばなれした横顔。小肥りに皮膚がすんで青味をもつ肌。自分を打つときのいっそう扇情的な母親。全身で毬のように武者ぶりついてくる血の気の多い母。感染しやすい快活と移り気でむずついていそうな、婀娜な母——それ故に、久振りに逢う津田は、母をそつと味わっているような風があった。

当分は、池の坊と裏千家で生活の道はつづけられていくだろう。が四十二歳が、いずれ第二の守山を作るのである。寧ろ作らない方が嘘だと津田は考える。津田はこうした考え方を恥じるまいと、己に言いかけ、それで承知する自分の氣であつた。一年に五、六回、逢ったときだけが母である。余日の母は、女としての組の方へ入れて置きたい。が、こう考えるのも永

年の別々の生活の故だろうと、考えて佗しく、何ともいたし方のなさで、棚の上へという風にかたづけ、津田は大して良心の咎も感じないのである。
長良橋を津田がかえるとき、金華城上の月は高く、あくまで明るかった。

二

二十代の自分が親の痴情をさばかねばならないなど、不幸なことだと、苦味とやるせなさを何時幾度逢おうと、もの別れになる守山との交渉のあとさきに味わわされて、五日目だった。

津田は法善寺の朝の梵鐘を聞きに出かけた。守山の目をごまかすために三日置いて、昼近く帰って来ると、隠家に居る筈の和緒が先ず津田を迎えた。

「あの人が自殺したんだよ」

えっ、と言うほどの愕きである。

「わたしの居所が判らないので、あの人は毎日わたしを探してまわったんだってさ。名古屋へも四日市へも、一の宮へも、自分で出かけるといふ熱心さで、それでもとうとう判らないとなって、朝からむちゃくち

やにお酒を飲んで、よっぱらったそのあげく猫いらずを二十瓦^{ゴウ}呑んでしまったんだよ。胃袋をさっそく洗浄したんだけど、二日間お腹にあるものがお酒ばかりで、心臓麻痺をおこして昨日とうとう死んじまったんだよ」

自殺がぴんと来ないのである、嘘のようだと考えた時、津田は母の顔をぼんやり眺めていた。

普段着と着換えて、再び和緒とむかい合った時、津田の心のなかに興奮してくるものがあつた。

「お葬式は？」

「今日の午後二時と聞いているんだけど」

「当分、うちを出ないようにして下さい」

頷くのを見、津田は急激にくる息切れのようなものがあつた。自分の頬の冷たさを感じた。

「灯台もと暗して、よく言ったものだね。あそこにしたのにととう判らず終いだつた。そのくせ、あの人は二、三度あそこへもやって来ていてね。見つかったらきつと殺されていたよ。捉えられてごらん、猫いらずの半分は大丈夫飲まされたに違いないよ」

津田は、そんな母の顔を見るにしのびなかつた。津

田は死という重い事実をいくとおりに考え直しても、素直にその言葉の持つ実感が得られないのだ。どこやらにうしろめたい感じが残る。まるで我がことのように気恥ずかしいのである。また母に對しても、何故自分が氣まりの悪い思いをしなければならぬのか、妙な氣だつた。和緒は落着いている。和緒は少なくとも自分がことの焦点に置かれていゝということを氣にかけていない風である。粧^{よそが}つた無神経なのか、津田には判らない。が一応は、その平靜を認めねばならないほどの静かさであつた。

この母は、守山の死を嘔^わつていゝかも知れなかつた。まったく人々をほろりとさせない、肩身の狭い死に方である。生命の脆さを思うより、輕蔑が先に立つ。しかし津田には一概に笑ひ切れないものがあつた。和緒のようにすましてはいられない。津田は自分でも十分非人情であると構えているが、この暗鬱な感じは、理不尽な自殺の事後の咎にちがひなかつた。その咎を一体誰が受くべきか、母か——むろん和緒である。津田はそんな責任はもちたくなかつた。持つ意志もないのに、この弱り方は何故なのか。癪^{いら}だつた。